清流大川

羽地中学校
学校だより 86 号
せいりゅうおおかわ
H30. 9.12

差別の歴史を調べる

患者達が素手で掘らされた早田壕の前で

二年生は4日(火)、総合的な学習の時間で戦前・戦後のハンセン病と隔離政策の歴史を学ぶため、沖縄愛楽園及び交流会館を訪問しました。そこでハンセン病患者が受けた被害を知り、差別について考えました。

最初に全体で交流会館の講話室にてハンセン病や愛楽園の歴史について確認した後、3グループに分かれてボランティアガイドさんの案内により、園内を巡りました。雨上がりで湿度が高く、日差しで皮膚が痛くなるような暑い日でしたが、二年生はガイドさんの話に耳を傾けて聞いていました。聞く態度が向上した二年生でした。

1332人の御霊が眠る納骨堂・平安之苑の前で

自らもハンセン病患者であった青木恵哉（けいさい）氏が沖縄にやってきたのは昭和2年（1927年）のこと。キリスト教伝道を行うかたわら、患者救済のための療養所開設を目指したが、県議会をはじめ各地で猛反対に遭い、患者は放置されていた。

各地を追われ、焼き討ちなどにも遭った青木恵哉は昭和10年、羽地内海の無人島ジャルマ島へと逃れるが、そこは死者が風葬される水も出ない無人島であった。

その後、屋我地島大堂原（やがじじま・うふどうばる）の土地を購入し、青木ら15名が移住した。

昭和13年には国頭愛楽園として設立、昭和16年に国立の療養所となった。

ー Leprosy.jp HPより抜粋 ー

旧面会室の中　窓ガラスで仕切られている。

旧面会室

ハンセン病の人がどれだけ苦しい生活をしてきたのかがわかりました。差別され、石を投げられ、家を燃やされ、隔離され、親とも会えないなんて、とても苦しいことだと思います。

名護市内にあるにも関わらず、私は「愛楽園」の場所を今日、初めて知りました。施設内は意外にも普通の家のような自立した生活を送っている人もいるそうです。私が驚いたのは、全国にある13カ所の療養所で「愛楽園」だけが県立でなく、自分達でスタートした場所だということです。青木さんは素晴らしい方だと思います。納骨堂にいる方々が家族の元へ帰った時が、ようやくハンセン病患者への差別が終わる時だと思いました。

次年度は自分達で事前に調べ、他のグループに教えられるようなジグソー学習の形態で深めてはどうでしょう。

冷房が効いて机椅子も座りやすく学習環境が整った部屋

ハンセン病について知り、ハンセン病患者の辛さを知り、差別される辛さも知りました。ハンセン病患者だけでなく、その兄弟姉妹や家族も差別されていたことがわかり、かわいそうだと思います。私はこれからもハンセン病について学んでいき、また差別することがないように生きていきたいです。

この愛楽園に来たことでハンセン病がどういう病気か知ることができました。一番悪くてダメなのが差別だ。人権を無視した行動が一番ダメなんだと思う。差別をせずに生きていけたらいいと思います。今回、愛楽園を訪問させていただいて深く感謝しています。

私語もせず、聞く態度が上達した